

1. 起業の動機

会社員生活を 25 年の節目で繰り上げ卒業しましたが、具体的な計画を持って独立したのではありません。組織に属する会社員としては自分でできる限り働いた（会社には十分貢献したと思った）ので、自分のことや家族のことを考える時間が欲しかったことも動機のひとつ。

最近では卒業の前に再就職の準備をする方も多いようですが、私の場合は勤務の最終日（正確には退職の翌日）まで、業務の引継ぎや資料整理に追われる状況でした。

退職してからも、毎日が日曜日ではなく、2度の海外勤務と転居に伴う荷物整理の傍らで、今後の活動指針を考えはじめました。やっと考える時間ができたので次の方針を決めました。

- ・個人でできる楽しい仕事を選ぶこと（組織や資産を持つリスク v.s. 何も持たないリスク）
- ・学んだ経験やスキルが生かせること（IT 企画開発から運用まで経験）
- ・経験のない部分がカバーできること（社内システム専門だったので営業経験やコネなし）
- ・経験を積む事が価値を高める役割を探ること（独立当時 48 歳、今後 30 年通用する生き方）
- ・社会や組織が求める価値をもつ役割であること（やはり役立ちたい）

あっという間に 1 ヶ月が過ぎ、失業認定手続のためにハローワークにいくと、求人ファイルは整理されネットアクセス用の端末機まで用意されていたのには、時代の先端をいくような感じさえありました。しかし、求人広告は多いのですが、上記の目的にふさわしいものはなく、また要求されるスキルは表示されておらず” 頑張る人、誠実な人 ” というものばかり。マッチング条件さえない内容で、従来の求人票を電子化しただけで無駄が多いと思いました。ともかく、失業届けの書類は受理され、手続の詳細説明のために、xx 日に出頭せよ、という指示でした。

人材紹介会社が主催するセミナー受講がきっかけで、大手企業からの求人を多数紹介していただきました。これまでの経験が役立つような事業戦略・IT 戦略に関するもので、事業分野の異なる複数の企業で経験することに魅力はあり、人事担当者の熱意を感じる部分もありましたが、組織の看板を離れて自分のブランドで自分自身を開発していく上記の目標とは異なるものでした。

公認システム監査人制度が開始された 2002/6。登録申請のため、過去の業務経歴を整理しました。システム監査技術者試験に臨んだのは、企業グループ関連子会社の IT 化を方向づけしていく立場として、企画開発から保守運用までの全体の流れを把握しておく必要を感じたからでした。当時、導入開発プロジェクトが遅延したり大きな障害が発生すると、問題の仕分けと解決のために派遣されることが増えていました。在庫が合わないとか、過剰在庫の発生という課題に対し、また、事業再編のため拠点を統廃合する場合に、短期間で業務手順と情報システムの両面から円滑な移行を準備するという業務も、選択と集中、迅速な意思決定という経営判断を支援するためでした。これらを通じて、アプリケーションや技術の標準化だけでなく、業務プロセスの標準化や組織体制づくりを実践してきました。認定を受けて、名刺の肩書きを公認システム監査人としました。

2. 公認システム監査人の付加価値

公認システム監査人の業務の特徴は、他の専門職との幅広い業務マッチングが可能ということ

だと思っています。

当初からわかっていたことですが、自宅を事務所として旗揚げしたものの、自分でお客様を見つけるための接点を持っていないばかりか、営業センスの欠如を痛感しました。多くの企業で個人は相手にしてもらえないばかりでなく、実績がないと提案もできない。独立したばかりで実績があるわけも無く、必然的に ISMS やセキュリティ対策などの新規分野へ傾斜しました。しかしながら市場としての盛り上がりには今一步で、準備が必要だと痛感し、まずは、経済産業省のシステム監査企業台帳に登録しました。

次に活動の幅を広げるために、システム監査業務と関係するマネジメントやセキュリティ分野に特化した部分の情報を得るために、個人で参加できる協会や団体に加入し、また集中的に講習会に参加しました。特に国際的にも認知される ISO 関連 (EMS/QMS) のシステム構築、内部監査、審査員コースや、これから市場を開拓する情報セキュリティ分野の動向を把握するために、ISMS 審査員コース、さらに企業活動全般にコミットしていくため経営品質賞のアセッサコースを受講しました。これらの研修コースの中には、上位コースを受講するための経験や前提条件を必要とするものも多く、時間を確保できる時期に集中して終了することを目指しました。

この結果、公認システム監査人+ α 、というより、改革目的 (α) + 公認システム監査人としての付加価値をつけることが可能となりました。また、どのような立場で活動していくかについては、次表の*印のように組織に属さない方向を選択しました。

活動の立場	内部監査	外部監査	第三者認証
独立して活動	* 内部監査支援	* 監査員	—
審査機関と契約	—	—	* 契約審査員
一般企業内監査人	内部監査	コンサル部門	—
監査企業の監査員	内部監査	外部監査	—
(審査機関の審査員)	—	x (不可)	審査員

企業内の社内システム担当から、第三者としてのマルチ審査や監査に対応できるように自身の活動領域を改造したわけですが、時間と費用だけでなく、興味を持つ分野を選択することが継続のポイントだと思います。

3. 夢は、社会システムの監査人

システム監査は、情報通信システムの企画から運用までを監査対象にしていますが、私自身は IT 分野に限らず、組織の作り方や組織行動にも興味を持っています。

いくら個々の技術や効率がよくても、全体の効率や生産性が向上しなければ、部分的な過剰品質、過剰評価となってしまいます。効率的な IT 活用には、広く企業システムのプロセス全体を考察することが必要となります。全体最適とは、このあたりの問題意識と理解しています。

これを発展させると、企業から産業、特定の拠点から地方や国、さらには国際社会での最適な仕組みづくりという目標ができます。個々の SE や監査人が具体的な目標をもって、所属する部門やグループ、得意先企業や自治体に働きかけていくことで、いい仕事がより大きな活動につながると思っています。

セキュリティやシステム監査の+ α として興味を持っている分野は次の3つです。

- ① 個々の企業や産業力強化の仕組み (生存の基盤)
- ② 医療と保険給付の仕組み (生活コスト削減、必須サービスを効率的にする)
- ③ 教育研修の仕組み (後継者を育てる)

社会に貢献できるというメッセージを伝えるには、多少の大風呂敷のほうが、公認システム監査人には似合うのではないかと、とも思います。自分自身の励みにもなります。公認システム監査人を尊敬される、また後輩のためにも魅力のある職種にしたい。常に研鑽を必要とする厳しい職

種なのだから、継続的に研修費用は捻出できるような処遇を確保したい。このためには、仕事や事業分野の専門知識、経験と先見性を持って、また見識を持って活動することが必要です。

最近では、IC (independent contractor) という言い方もあるが、自宅を主な事務所とする限りは、公認会計士事務所や弁護士事務所と同様に、SOHO であり個人事業主です。

ネットを利用した情報交換が便利になるにつれて、仕事の調整やコンサルティングの部分をネット利用で代行することも可能となり、組織に属する必然性が薄れ、公認システム監査人の活動には追い風です。

課題はまだ認知度が低いということ、有効性を認めてもらいにくいということ。

当面はできるだけ多くの異なる企業を体験して的確な診断や方向付けができるよう、監査技術を磨いて実績を積み重ねておきたいと思います。

これまでの活動を振り返ってみると、お客様に教えていただいたことも多く、自分自身の不備に気づいている部分や多くの知らない部分で迷惑をおかけしています。この場を借りて、お礼申し上げます。また辛抱強く付き合ってくださいまして、有難うございます。

*本記事は、SAAJ 会報 81 号 (2004.09) の内容を再編集したものです